

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
分担研究報告書

先天性および若年性の視覚聴覚二重障害の難病に対する医療と支援に関する研究

研究分担者 高木明 地方独立行政法人静岡県立病院機構静岡県立総合病院
移行医療部 部長

研究要旨

令和5年度 班会議における実用化研究の分野で重複障害児に対する人工内耳適応について言及した。具体的には、重複障害の乳幼児では術前の電気生理学的評価、あるいは画像評価で人工内耳の効果が否定的とされても臨床的経過の中で効果が見られることがあるので、人工内耳適応は柔軟であってよい、と述べた。

A. 研究目的

重複障害児の人工内耳適応はどうあるべきか。

B. 研究方法

臨床経過の経験から述べた

（倫理面への配慮）

C. 研究結果

蝸牛の嚢胞状奇形による高度難聴、両小眼球症、視神経低形成による弱視の2重障がい児に対して、1歳2ヶ月時に人工内耳手術を施行した。以降、経過観察を続け、現在11歳となったが、構音良好で会話もスムーズである。2023/11/8（の診察時点でのCI2004聞き取り検査では単語72%（2回提示で96%）、単音節60%と良好であった。2重障害に対する対応は難聴の原因が蝸牛の高度奇形あって、本例のように利用できる電極数が15/22と限られていても早期の人工内耳埋め込みであれば、順調にきこえを獲得し、音声言語が伸びることが分かった。2重障害の視力に対する医療的介入が難しい現在、人工内耳の積極的活用から、聴力を得ることを早い時期に考慮すべきである。

D. 考察

重複障害児の電気生理学的反応は中枢神経回路の未発達が原因のこともあるので、信号の検出が困難なことがある。また、内耳奇形、聴神経の低形成が疑われることもあるが、臨床経験上、経過と共に音への反応が見られるようになる症例がある。盲聾の重複障害は重要な2大感覚器の障害であるので、すこしでも人工内耳の効果が期待できれば、埋め込み術をおこなうべきであろう。

E. 結論

重複障害の乳幼児では術前の電気生理学的評価、あるいは画像評価で人工内耳の効果が否定的とされても臨床的経過の中で効果が見られることがあるので、人工内耳適応は柔軟であってよい、

F. 研究発表

1. 論文発表
該当なし
2. 学会発表
該当なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし